源氏引哥

Genji monogatari hikuta

[Kyoto, 1654?]

PL788
.4
.G43 G3984
1654
Copy 1
Asian
Japan
Case

2004551296

源氏物語引哥

きりつぼ

ことこそは夜半のあらしのさむからめあれてしこるのまゝの板戸や

朗作
君と我いかなるすをちきりけん昔の世にそしらまほしけれ
高津内親王

後撰雜二
なすをきまるまゝれる枝もあり地をけ紙かき疵をいふかりかなき
友則

古今恋二
ことに出ていはぬたりそこなるを河下にかひてこひしきものを

万
愛にこもなるかもこしぬこゆれともはれかも夜とふこひのしけきを
僧都勝延

古哀傷
うつせこはから紙こつくもなくさあつかり草の山にかなるこうりこそ
よこ人しらす

拾遺恋五
もえたてしたいとなるもなん時にこそ人をしひのやまんこにを見

あり時はありのすさみにまくかりさなくてそ人の恋しかるけ家
よこ人しらす

後秋中
人はいさことそともなれなるめにてはれは家けき秋をしらく

古志之
むしろ玉のやこれうつゝハさゝかなり夏にいくこもまさしさりかなと
後雜一
人のおやの心ハやこゝにあらねとも子代せふこゝちに雨とひぬるかな
新勅集上
とふ人もなき宿なれとくり葉ハ八重葉にもさけしさるとかなと
いそかハ君きつらんにもさふ乃人もかよはぬ日やとれこゝち
六拾文
いかにしてありとしられし高砂の松のおもはんことをたつし
後雜一
人のおやのこゝろハやこゝにあらねとも子代せふこゝちにまどひぬるかれ
朗詠
志とられいかなるすをちきりかんむしの世にそしらまほしかれ
後文
蛍鳥の父をもねをもいろゝに抱うかゝ身をすくしてのこなり
天暦御集
いさゝその世しまその後の後の世をもしをかはしかゝ鳥となるかなん
作物集
玉すゝれあくるをしらそねし抱を夏にもこしとおもひけるかな
結賀
ゆひ和りきつもとゆひのこむらさ紀衣のいろにうつれとそ、まふ

こゝ人しらす
兼補
紀貫之
兼補
雅正
能宣

引二

はちす

拾雑秋
こゝろもちあるゆかんか露はちす人のまれひさかにくゝさ世なり
僧正遍昭

新古今恋二
かすかのゝわかむらさきのすり衣しのふのみたれかきりしられす
在原業平

拾恋四
さふそていとゝこそ人はあれさゝめをしるからひてそこ○ハ恋しき
なかはしのかい　いつれそんし
よみ人しらす

拾物名
秋風のよもの山よりをのかしゝ吹にちりぬるもみちかなしな
すけ

古雑下
今さらにとふへき人もおもほえす八重むくらして門させりてへ
よみ人しらす

古誹諧
そへにとてとすれはかゝりかくすれはあないひしらすあふさきるさに
よみ人しらす

後恋五
はちすはのうへはつれなきうらにこそ物あらかひはつくといふなれ
よみ人しらす

古夏
はちすはのにこりにしまぬ心もて何かは露を玉とあさむく
僧正遍昭

伊勢
よはひかはりてあひしことはかなそれ八十にいひつれ人へたゝう

拾雑賀
引よせはたゝにはよらて春駒のつなひきするそなはたつときく
平定文

古誹
ありぬやとこころとそこあひこ[illegible]ハこれにくきまてそ[illegible]
よこ人[illegible]

後秋上
あつるハ七夕つめにおもしくてこちぬふにさもあえすそ[illegible]
閑院

後秋下
こうことに秋にもあつかな立田姫もみちそむとや山をこさ[illegible]
よこ人[illegible]

拾雜
雲ねにてあひかこらハぬ月こにを秋やとるてゆくと[illegible]ハなし
伊勢

催馬楽
[illegible]にやとりハすへしかけもよしこもひもさむしこまくさもよし
よこ人[illegible]

古秋下
秋ハきぬもみちハ宿にふりしきぬ君ふこ分てとふ人もなし
よこ人[illegible]

古秋上
[illegible]てこハおちそしぬへき秋萩の枝もとをくにをけ[illegible]
よこ人[illegible]

古夜
ちりをこにもへしとそしふささしよる妹とこちぬりとこ夜の[illegible]
[illegible]

後秋上
ひこほしのまれにあふ夜のとこ夜ハうちとこへさも[illegible]
よこ人[illegible]

世中ハくらへくらしく[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

なりとめにこゆるされ紙にはとめるをあけに

催馬乗

まいへんハどもりちやうをもこれ[illegible]紙おほ君きまをむこにをん。

こさられにあるよけん。おもひさしをかせよけん

拾意三

いかなりし時くれ行の一君にいくらかしをくるしといふらん

よこ人しらす

とりと人を物にもかるや世中をありしなるれ[illegible]勇とおもひん

万

ゆきなりのちせの山の後に又ありんかるしすハふなりしすとも

よこ人しらす

古意四

それをこにおもふことして我宿をこさとれいひそ人のきりくに

よこ人しらす

新勅意二

お坂の名をハこれこそこしかともへくつるを紀の川しくもあるれ

意しさ紙なりくつけてかるくさまん後にもこしすぬる歌なるれハ

是則

新古意一

それもしやふきやにおふるもしこされありとハこしてあるぬ君かな

うつきこ

夕やこはこちらにくし月まちてくれワせこそれまきもこん

六花集

いまれゆれゆけられ子まひたりハこきハ九ちるは十六

六拍二

風ふけと人はいひて戸はたしあけんと君はいひてし物紙

拍遠二

君こふる泪のかゝる冬のよはこゝろとけたりいやもねしらず

よこ人しらず

よりハさめひりハちるあはくらきれて其れこれめそいとちるりなる

後遠二

すゝかやまいせおれあまれすて衣志ほなれたりと人やこうるらん

これまきの紀ト

古遠二

枕よりまたしたり人まちきに遠紙ちるこはきあへしてまし つるべ

平貞文

さりくしを袖にもかるや世中をいりしちるしれワ方とおもひん

夕かり

古雜下

世中ハいつれかさしてワるらんゆきと海ひとそやとしさしむる

よこ人しらず

六拍

ちるまをんにむのうてちるもハ重むくしとくらん宿にふたりこそはめ

引四

古拾二哥
打ひ寸をちかた人に物すまれそれそこにしろく咲りは何れ菜そも

古雜上
世中にさしぬられのなくもれ子世もといのり人 葉平 恵子 友則

古恋二
夕されは蛍よりとけにもゆれともひかりこゆきや人のつれなき

万
あさかほ寸いたくなくさそひつせこかあさけのすゑこれはなるしき

古脈
冬ちかし雲のとなりれちかけれは中垣よりそれそちりけり 深養父

うれそくかをこちふ山のしねりとあれそれくしとこうしあるは

万
まかそれおき中河にしぬとも君とかたらふことしけきめやも

古新上
里はあれて人はかりにし君なれや庭もまかれも秋の野にしなり 傍正遍昭

新古雜下
白波のよすりなきさに世紀つくしあまれ子なれはやどもさらめ寸 よこ人 恵子

古恋六
あまれかりもますむくしれ我かりとねをそなりめ世をはうしうし 典侍藤原恵子朝臣

六拾
君によりよくよくよくとよくくとねをのこそなくよくよくよくと

後雜二
年ふれハ我くちこもしら川のこつもくむまてぬまけかれ　ひかきの嫗
拾遺四
せふとていとこそ人になれさらめしらなしのてそこ日ハ忘しさ　よこ人しらす
拾遺四
わぬるハのくらしからん君よりも我そまさるのもふりかひなき　よこ人しらす
万
うつきこの世ハつ日なしと思りまし後秋風さむこ志のひ川うも
古志三
こりすまに又もなきか名ハ立ぬへし人まくかゝぬ世にしまし　よこ人しらす
古志四
逢まてのかゝこそこそどゝめけめなこそようふもくつぬくを　おき風
すきましもとも明末も二こちになんて別のなき世なりノをハ
わかむらさ紀
新古歌下
古ゝに恋ハちりつゝこよしのゝ山のさくらハまゝさうしてなを　家持
古雜下
いなるらん岩ほの中にすまハかは世のうきことのしきてこさらん　よこ人しらす
万
みよしのゝおほかハ多のゆゑひかまちらぬ抱からなこのしらつゝ

おもひすむそらのうちもさらしく秋に生るゝゆめなてゝのゝ
大僧正慈恵
続後六
そのかみはいまおもはんねまおもひつゝ夢のむかしも今はやさしくもん
よしなし人きよす
続千四
いにしへの室中にさへけりけりかしにさしくむかしはまなきる
如空上
雅有集
ちりはこはちかはなかやさしくちりやまちまちむの鐘井もきむさき
くやまさしむさきくやさしさんさしさんと
悪をいかさゆらん人はまことにもつゝきまれとさきさん
いのちをば心にまかす物ならはいかにも人をこひしと思はん
元良親王
拾遺
あさましや剣の枝もたわむまでこは何の身のなれるなるらん
玉葉
霊鷲山のけさへ鷲の山の末かくの人をはまなはれは
山のいの水
くやしくそくさそめてけるあさかれは袖のしめゆる山の井の水
新古今
あふことも今はなきよのゆめなりてなかれぬ身をもいかてはへる
上東門院

伊勢
出ていなハたれか別のかたからんありしにまさるけふハかなしも　まこと人三十寸

古恋四
堀江こくたなゝし小舟こきかへりおなし人にやこひわたりなん　まこと人三十寸

古恋一
いつとても恋しからすハあらねとも秋のゆふへハあやしかりけり　よこし人三十寸

新勅恋二
あしわれらしまこきする浪のまくらしか君ハ思はれらふさも
人しれす我ハいつけさも年月へてあるをこそうきあふ坂の関

万
いもかゝと行すきかねて草むすふ風吹とくなあはん日まてに　まこと人三十寸

後恋五
いつかはとつらきそなから秋のよのあはれとゝしはまさるらんやハ

風俗常陸
ひたちなる田をもてつくれとたゝ山をこして夜をこし恋さらにこそ又まさらけせる　素性法師

古恋之
こゝろさへいせの御とそこゝろをきてこそやこそ恋わすれ　ゝさ奴け

六帖
ちはやふるもしのそとゝかくれぬるやさしそれハしきしまのゆく　よこし人三十寸

古雑上
しきしまの一ゝもゆくすゑしきしみなくあはれしもあはれ　よこし

夫木集
ちらくきとゆくもあさなるむかしみくあらしさえはなさにくれ
とおもふ覧

信明集
志らねてこそすゑくれたかりるとも家にとくれし秋やとすれし

六帖又
こゝのつのよ消さくしなる人のあつまるは今そくちそしくそはすく今
つゆさ

拾遺雑賀
つらぬ人をさつまつ　いつくえなる我をおそれといそぬ秋そちはき

催馬楽
いまかとやせれの門ゆきゑのをてやよふゆかいのちのさ我のちる我よ
やつしるん志てさそきおやりやとり益やとりやとりそあそん志てくさ

六帖
さくらまのさこれいろゝしさ山のさゝまくもゝ月我あくりれいいさ

古歌
こしなるしいたまやいいのちもとめなそ世中我よすくさなり
よミ人しらず

拾
ちろまいかり我のきく人ちいのちて　おやあそ　つまりはあかりれ

夜ふかれと山いさむしといふかれいはりいたきぬいまかわさそん
中務

後恋二

我袖は名にたつ末の松山かそらより波のこえぬ日もなし

土佐

古恋三

秋のゝにさゝわけしあさの袖よりもあはてこしよそひちまさりける

業平朝臣

元真集

いつか我あるとこそれつさんうし衣こそみ[illegible]

あもきいとふいちふりそさらさ人の袖まさほさん人もあらぬく

百

よそにのみこひやわたらん紅のすゑつむ花のいろにいてすとも

くれなゐの色にはいてしともしらはあらはに思ひつくてあり

風俗哥

多ゝ良女乃花如加以祢利好年夜紫色好年夜

たゝらめのはなのごとかいねりこのむやむらさきいろこのむや

拾恋こ

こゝろまさに中にありしやとりさあかぬ夜をなかそへてつくれ

よみ人しらず

拾恋一

あらむのこしちゝあるきにわたりまちひすれは恋

素性法師

古恋上

あしひきの山さしつる世に拙さとこれあらしまれとそしれちかりけり

よみ人しらず

後雑下

まはれては蓑をとりても山ひとやまかこそけてきみかとへんとは

業平朝臣

中治大納言相俊
我ゆへそつきはきみつきすれとも人ますらへはれかしさる
万
まほはねとほしむ梅の花をそ我もおしこゆりてあるむれ

もみちの賀

拾遺 一条摂政
哀さもいふへき人はおもほえて身はいたつらにありぬへきかれ

謙徳公
我しあまうら紀心のつくからにかけし心はをりもしらしなり

後雑一 兼輔
人のおやのこころはやうにあらしとも子をさしふしちにまもひぬるは

新古雑上 恵子女王
よそへつゝこれと家にまもるくさます いかにかすへきとこ夜のされ

後度 よみ人しらす
我宿のかきのまうへしなてしこは花にさらるんよそへ川くこん

拾遺 坂上良女
志ほそはへぬる我の草なれやしらくすくなくこふらくれおほき

古恋四 よみ人しらす
いせはあまれ釣なゆふなりてふこるめに人をあくらしもは

古雑上 よみ人しらす
大あらきは来の下草おひぬれは鶴もすきあす多人もあし

ひまもなく志やうまやうなたあらされ事こそ夜のかけは志やうれ
小町
ほう門の一村すゝきかりかもんきみかゝるれのこ海もこぬかれ
けろふの日記
さしまけはあれこそまさめ草かれのこ海なつくめうもりれ下れ
しろかゝまくろかゝましつまおふつまてまたいとかゝ拙もおもいす
新勅雑下
せしゝとなりしれもしれもしくらふりぬるもこそかるしかれ
よこ人しす
後宮
うくかん人のきをやんぬれさぬはせひまあ人也今かゝさなん
中務内侍
催馬楽
やましろれこ海のうつまつくりなまやらしいしなやさいしなやうりつ
くりうりつくりかれ
二時
うつまつくり我をかしといふいかまをんなまやらいし
なやさいしなや
三時
いかまをんなりやしれましうりこつまてまやらい
しなやさいしなやうりこつまうりこつまてし
催馬楽
おつまやのまやのあまりれそのあまそこ我こちぬれぬとれとひこを

二條
みよしのもとしまあらそておもひとのと秋をあきしつらひ
てらすまを秋や人つま

為氏卿
わせこくるくさとまひちりさくらふれくまれかうまひるそきうしも　そとそうひか

大臣九
くれなゐにそめし衣きてくにさんかへりをりきさ見るらんかと　まん人去るす

新勅五四
よくくれての後そうるしき涸川そこもあしけりまあしりぬる昔人に

続古今
石川のこうまうひまおもひそこうれてかうさくひすか　二條　いつさんいさんあつ
おもひそあまる枕あすかいくしかろ　三條　くやうくやうくあつきそこうか

古今集
いぬかぬ柿の山あすかいさや河のさくさくへに秋名ませすれ　なきんしんせす
花のそん

新古今
てりまとらくあり見てそいつまれにれおもはる月にまちく梅そあまき　大江千里

続古今
ぬるも川のせられやうつる波にやうつろまやうち萩あるくておやさらかつま

二時
おやさくつまいまして家りしも志しあらはやもきれいちにくさ
よりん三時
くろかうちいのおそもさをくさしそさそこもとりこそこやらこよりん
古美之
こうへもなさ山さしれさくら芸ゆれちりなんのちそさくまし
後秋下
あつさち入され山も秋さりれあらうことしやいろまさらしん
お同大ト前

あふひ

古歌
秋をたふへをおもちぬむくひまや秋をふへのまれなれもしらぬ
三人志し寸
古大哥所
さしのく海ひのく海川に鶴とめくるしけしまくへけ紙こしこん
拾遺神
まくししも心してふけ志めれうちいちらぬもみちそおほちらの山
同坊門内
後文
ゆきくるハ十氏人のむくらかけてそこれむあふひてふる紙
古志一
いせの海につりするあまれうけるれや心ひとつをさくめるゆへ
くやしくそくしそめてけるあさまれハ神のこめるし山のおのあ

古詠下
分をすてゝゆきやしまかんせつよりかなる物はこころなりなり
おもひしとせつも物にせふなりおもひしとこにおもはしやあそ
和泉式ア
後拾遺
物せんへは深のほとりもワ分よりあくかれいつる夜ゝとそころ
伊勢
せひあまり出すし玉のあるなるん夜ふくこしも玉むすひさま
玉はこゝめしはれとも玉しくひとも むすひそとしる玉くへのつま
兼忠朝ト母のめれと
後雜二
むすひをさしかゝれこそまなりせはなるゝ志のふの草をつまくし
忠峯
古衣
とはしもあれ秋やは人のまゝへさあるをこゝろ遠しき物を
友則
後古秋上
吹くれは分るも玉ゝける秋風を及なき物とおもひけるか那
よこ人しす
後雜上
世中をくいひくてもそくはいるやいくまなしんとすしん
大輔
古誹
なけきこゝろ山としこゝろなりぬれはつゝつえのこそまつけかれなる
神無月いつも玉くれはふりしとくく袖ひつるおはなるゝさ

後撰三
ことゝしハうつろふまて濃てまし心ゆるやをもはせけり
つらゆき

拾四
うれしくハワすることもありなましつらきそなかきかたみなりける
深養父

こゝろあれあるれてあるれそあるれとも云しらんや云しらんや

古別
命たにこゝろにかなふものならハなにか別れのかなしからまし
しろめ

万
ことの葉れゝわゝ梅くゝをまれそめて衆をやへゝそゝわゝゝ
人丸

新古恋二
みわすゝりゝ忘れそのゝちゝしゝれちゝれハ思ゝしてゝ楽そまゝれ
侍るま

古恋
我をのミおもふといハゝあるへきをいてや心ハおほぬさにして
よミ人しらす

新古恋
とくまてもものさへさきれゝをやハ人のためとてこゝろん
つらゆき

万 拾恋一
ちはやふる神のいかきもこえぬへしいまハ我名のをしけくもなし
人丸

古雑下
我庵ハ三輪の山もとこひしくハとふらひきませ杉たてる門
よミ人しらす

新系方
さくさきれをくそしことめくれハハ十うち人そまとゐをりけ
古意四
あまれ系ふことろりしなる新もしふ中をそさくなもれかそ
よこ人ちゝす
大和物語
池ハちゝむしなるれかこそて新こしきみなきそなるしき
あそさりき泪のまろくなりけハ世やつさぬしんときやこぬらん
古新下
世よふれハうさこそまされみよしれて君のかけ君ふこちしてん
よこ人ちゝす
新古意四
あまれ戸をとしあけるの月ふれハうさ人しまそこひしかりける
よこ人ちゝす
新古表
あきかをの家のやとりに恵をしきてちりを出ぬることそなるしき
一条院内裏
伊勢
いかしへの志川のそくまさくりゑしむしを今にちすよしもな
つゝゆき
古秋下
こゝ人もなくてちりぬるおく山のまみちハよるれなしき奴なり
山さくらこまゆくこちをへてなれハ久すこも人のこゝろなりなり
後雜四
かすちなぬ男のこ抱くしく世もゆしてまくるこまそに奴まけるれ
むこ

元良
人こゝろ心のやうにかへたやなどもなくてもとしにしたくなく
拾長
ほけきやうをまうえしことはこゝろこゝろなくてそこ
行基
素性法し
後雜一
をどりこさく松かうしまなふそこうむへも心あるあまはすこなり
催ら宗
なめなきこのさいさこのこゝろさこの二段おのへにそゝろ白玉様しまやなさ二段
それもかくさんましまとましまと四段ねりをさこおのこそかけにさん
なき五段ちましまさんちましをちましを六拾心まさいなんゆり
なれさゆり菜の七段けさいたりもつ菜にあはまし物をさゆり菜の
菜ちりさと
奥
なこそ○とよもきれまうきなくれはうへしかさ○も蔵りあひにたり
いかへのことかたへはほとゝきすのなきりてかなこゝ心になく
たつ菜のをなつしほとゝきすかたしひしつなりぬ日そなさ

次丁

引七

古別
しるの事のこゝろはかたくわるとしゆきめくりてもあはんとそせふ　友則

古意二
我意は引濤もしらすもてもなしあふ代かさりとおもふさりそ　よこ人しらす

古表
かりそめのゆきかひちとそせひこしいまはかさりのかとてあらなる　在原しけるる

伊勢
いへはえにいそるはむねにさはかれてこころひとつにあけくこゝろかれ　よこ人しらす

古雜下
いかるらん岩間の中にすまいかは世のうきことのきこしこさしん

古意八
あひにあひて抱せふこゝろの我そてにやどる月さへぬるゝかほなる　伊勢

後離別
ゆくさ行代しらぬあるゝかるしきはしらめのまへにおけるぬなり　よこ人しらす

後離別
恵かわかるにありてふあるゝ川まつりは神にそあるへしあるな

新古表
あるはあるくあるさはかすそふ世中にあはれいつれの日まであけかん　小町

古雜下
日かりなさ谷にはまとにそあれは咲てとくちる抱せひもなし　深巻父

新古秋上
このゆふへふりくる雨ハひこほしのとまとろこ雨れかひのしつくか　赤人

古雜下
[illegible]とふ人あらハ浮ヶのうたもしほたれつゝもふとこゝへよ　行平

君こゝろ泪おちそひこの河のみきはまさりておもふへらなり

白波ハたちさりくともこりすまれ波のみるめハかくんとそおもふ

六帖
わきもこかさてハよりそふまれたしらさもむつましかゆりとせへを

後雜一
人のおやの心ハやこゝにあらしとも子代せふこゝちに雨とひぬるかれ　兼輔

いせ人ハあやしき袖そなとゝいへハ小舟にのりてなこれうへこく

古秋上
あれまよりもりくる月れけれハ心つくしれあきはこさにかゝる　よこ人しらす

後古羇
しひ人の雨もとすしくなりにハり関吹こゆるすまれうらを　行平

拾雜志
泪河ちまされもやしきたへの袖のうさてとまらさらしん　よこ人しらす

玉雜二
波たゝハおきれむもとよりぬへしせふるより風もふるん　こゝ

古意一
いそまれを人かとゝめそおほ舟のゆくのゝ[illegible]まれ[illegible]
よそ人しらす

古雜下
せひきやひちれまれにおとろへてあまれちまさきいさりさんとい
[illegible]

新古雜下
もゝしきれ大宮人ハいと夜あれやさしらさしてなふもくくしつ
赤人

後雜二
うれしきもうきも心ハひとつにてまれぬまれハちまさちりなり
よそ人しらす

灌馬示
あすかぬにやとりハすへしおけかけもよしみもひきさむしまくさまし

拾遺四
我くらゝらのくろこ夜心あしはきゝをこすしもをのれいるけ

あくし

志こうゝ泪おちそひ山川のみきはまさるまておもほゆかれ
あしきほのきほのやほあひにやくきほれらくまれハおひになかれ

後雜三
波にのゝぬれつゝ拾紙吹風の夜よりうれしきあまれ津ゆきふね
つゝゆき

拾雜秋
秋ゝとにかりつゝいねいつゝれと老になる男そをきとゝろゝき
忠見

惠慶集

あさりするよさのあま人ほとゝしうらぬぬるとうすとしたれり

新古雜上

あさらまてはりとちるにしし月のちかきこよひはこゝろかしらも

まさよひにおきてたくらぬちかくゆる門さしていれぬちるらん

松風をしらるれにかゝる山ふしはこゝろ紙ことしとしらぬちりかり

催る系

いきの海のさよ紙なきにしほかひにあれりそやつまんかひやひろん

古玄一

ゆふにはしのふることそまけにかゝるにはしとおもひしもの紙

新勅撰

これしき紙昔を袖にてこゝろをこよひは分にもあまりぬかれ

後雜一

何をんにへたれこゝろめ紙しけんおきけむも紙かつく分にして

思ひ

逸しとしまさこゝぬ人のいひりてこゝろにもれしちやましきれ

古非

ありぬやと心こゝそしあひこれはこそふれにくさまてそ逸しき

後去下

あさまよれ月と雲と紙おもしくはあそれしれしん人にこせもや

こゝろね

よこ人しら守

よこ人しら守

よこ人しら守

源信明

ちふとちいさみにゆんむ江の海入江のそこにしろむ月の雪
久かたの月毛の弱を打てやこそぬらんされしきこ紙まけりな
後拾雑二
やすらひにまきれ戸こそは行こさしめいりに明ぬり冬の夜なりしん
和泉式部
ますれしさちひしこと紙あやまるにはみりきれ山の雑もことこれ
後恵四
おちしくは君とならひの他にこそ力をなけれとも人にいられ先
よこ人ちこ子
後雑一
人のおやの心にやこにあらしとも子紙せふこちにまとひぬりな
兼輔
拾恵切
ますらるゝ力をへおもしすちひてし人の命のたしくもありな
君を
君をすむ海人の君にさがえめこそ紙こちなけくいきとしらまを
みおつくし
後石奏
これこひはこちりりともしかやくかふりはおるしりこにあひかん
石別
いのちこに心にかるふもれなしそしなかりこれのかるしりしまし
しろめ

賀一
ありつゝも子日のあまるうしハうし松なくしてのくへからまれ　つらゆき

古雑下
いかならん岩ほの中にすまはかは世のうきことのきこえこさらん　よみ人しらす

新古恋一
とくまつらしよりをちかこうて西の我をこそまたれへてそ川かなか　伊勢

後千哀
わかれてはすむへきほとにけれこしらへんとするにれかたのみえて

古恋三
ありすまかよ文まかうき名ハ立ぬへし人まくかゝぬ世おもしすまの人も　よみ人しらす

後恋五
わひぬれハ今はたおなし難波なる身をつくしてもあはんとそ思ふ　元良親王

古雑上
難波かたしほみちくらしあまの衣たみのゝ嶋にたつなきわたる　よみ人しらす

古雑上
夜まよりてもあらぬ涛をゝふゆけは名にたつれぬされは有ら　つらゆき

今はとて涛るゝときもあれはひれかりてそせうつもしらさ

よみ人しらす

古雑下
わくらはにとふ人あらはすまの浦にもしほたれつゝわふとこたへよ　行平朝臣

古雜下
今さらに何なひ出しん行のこのうさかしさけさ世とは志しらや
三字
訓古歌上 万
岩そくくらひのうへのさくらひのまえ出り歌にあり
志賀皇子
古雜下
世中ハむしりやハうりなん我身ひとりの為にあれなり
よこ人志ら守
古雜下
よれうきあらしぬ山路へつらんにハなもふ人とそほとしなりなれ
もれへのうしな
後意三
すゝか山いせおのあまれすて衣志ほなれたりと人やうらん
これまこ
はつりう心もありて至りつらんむけの神となりうれしき
忠見
撰父
手ふれハうしれ白山なひにはりおほくの冬のゆきけもなりけ
古東哥
みきふらひこうさとしまうせこやきれこまれ下家を毎にまきれ
よこ人志ら守
古雜下
我庵ハうもれ山なこひしくはとふらひきませ松をそう門
いとこそまきりにまきれ志れしといひしにたりふとれつらさ
後
引うへし人ハむへこそなひにはれ松のまたくなりにはりなり
三字

古雜下
さひさやひるれまれにおとろへてあまれなるこゝ[illegible]いさりせんとハ
古雜上
[illegible]

ときや

古雜下
[illegible]

雲風

古雜下
[illegible]

古雜下
[illegible]

伊勢
[illegible]

古雜下
[illegible]

そのこえハ拓なしまたもすけ久んうき世中にかくらすもかれ
世中ハくらへくらしくなりにけりなくこしかくせふもちなし
元真集
里ことゝいりにせよとかかくのこハちらしもこゝハ志しかるらん
新古新下
都よりくもれハ室ころおく山のよ河のあそすゝよりなん
天暦四年
甘新上
雜とりも上ろ人にきんかうきこれ松をむりしれとをるらるくこ
かさ丸
内傳
今まてにわまれぬ人ハ世にもあらしいとれらさ海くとしれへぬれハ
古新下
久かこれ中におひくろさとなれハ光をれこそこのむへ
いを
新古新之
あまちにてあいとしろかにうし月れちかきこよひハさころかこも
ろ
そのこえハ おにもあて
北・宗
それこ海ゝや我にまれにくさこふくさハとりかんくろハとりなにとりかん
うもいろハいりにあそれとせふらん三とせになれとあしたすして

うす雲

後宮之
やさらへて縁のもとにしす成ぬれそつきさしろのおほくもあるかな

持宮人
うしこその後さへ人のつくりしハいかよいひそかねをもちゐ海し
よこ人ニ寸
かくこひん地さまさかそ思ひおきこころのこそまさしかりかな
よこ人ニ寸

催馬楽
様人そのふひちしめ三海つゝ代ごまりつくれかそかへりこんやたよやさ
次かへりこんやそよや二所ことをこそあすともいはめをちかさにつまさるせな
なれハおしすもさねこしやそよや しやすもさねこしやそよや

世中ハ夏のつくりのうき情かうちつくしつゝもれをこそおもへ
かんつけのこねを

古哀
深草の野人のさくしこころあらハとしもかりハすこそめよさけ

後後難中
我さふ人ハ草葉の家なれやかくれそそてのそそほけしん
よこ人ニ寸

ひもとほれもしかりをいかにもんもくさよけよちかき笠りを

引十六

拾雜下
雲 秋よさひこゝれてまさりのつ時よつけつゝうけ家こゝろも
つゝゆき
よこ人しら寸

古意一
いつとても恋しからすもあらの秋のゆふへをあやしかりけり
中原致時

後拾雲上
梅の香せさくらの雲よりはなきて柳かえるよさうせてしかれ
よこ人しら寸

新勅意四
あつさらひきろのはなり名のりそれこれうき袖をしらをそあらん

あさかぞ

伊行尺
逢せしのみそきを秋ハうけすとか人をしらすつゝみつゝして

住吉物語
恵か門いまそすきり出てこゝ恋すか人のなれなすかこを
よこ人しら寸

古意四
里人のことハ夜のゝ志けくともかれゆく恋よあそさしめやも

伊行尺
すまれあまれ塩やき衣なれゆけハうとくのこゝそ
如まさりハれ
聖徳太子

拾上衣
忘れてかやうをかゝ山のいゝようてふきうひ人衣却やなし

伊行尺
身をうしといひこしはとよ今ハ又人のうへをもなけくへきな

拾雜下
おやのおやとおもはましりはとひてましけるれあまはあらぬ奴なり　國章

後拾遺三
今はこゝちひこゝるんとそうり紙人つてなくていふよしもかれ　尺雅

急しきこと心つくのもさなれはとき所なくもてそこつゝふ

玉さうより あふこゝるりいさゝ門いきとこゝへて紙名ちうすな

拾雜秋
いさうくておきあしてん冬の月まれ茲まもおとしきりなり　え補

拾草子
こゝよのこめつくしとこゝろ雪の山とこゝろくよかりよけるかな

なとゝん

秋はな紙夕まくれこそこゝなく茲の上風　茲の下つ雨

催馬平
こゝろもへせんやさきんこちけきぬは望京上の京茲の茲すりやさきんこちや

旁かき雲ねのかりもけるとや　晴をすもれこゝるしかるしん

後古拾遺
見られは月まもたゝけり秋風をいろなき物とおもひけるかれ　友則

引七

業平
そでくハつるハあくまで天にまで老姫の衣のそでくく

僧正遍昭
乙女子か神かの山のみかくれぬしらぬよに見ゆ打かへし　人丸

乎度綿度遠邑度綿尼備須毛可良多万半多衣度
（をとめともとめさはまもりさまをたもと）

迩麻波度年度綿尼備須衣
（まきてとめさいすも）

僧正一
こゝろみし海の花嵐中よりまく人あらの心をもかくへとくさあひぬる　人丸

雅子
わかみそにしそれまにとさやけしへもされ　二晩　けしへもくやあらはれ

やくよのまとき　三晩　わかれそことしやくよのまとき

玉くし

行長
世中はむかしからやまほ人あさきかおもくにあらけられ　為敷

吉田兼
いめえの床の山あらはぬや河はこえへまほれまさすか

法樹
ゆきとてもわかれ忘しをまりやましくとくらあるか

古雅下

どひきやひろれまうれまおとろへてあまれなるこゝきいとうきんとい

つくしなりうるれこゝきに時ゝてハ人のつくさそ世ひ志らるゝ

ちかやかりうるれこゝきに我なれとも我ハ見すれ世ちられすへなる

古五二

いつとても忘しうらすハあらねとも秋のゆふへそあやしかりける

雜抄

和歌川古河のへなる二本あり枝をしをへて又もあひえん二りとあり枝

いのりつゝこれこそ口ゝろもつき川うれしきせにもなりれあふやと

行勢

あきこゝそ神ハひつゝめなるゝ川方さへなりときけこれまん

大和 後古五二

うしなれ杜の下くさおひ無まりうるはひハあしとそ志ふ

清正遍昭

方十一

和きりれかやすき我方おひぬとも又二度へら志をしまくん

つくまねにおふるとくりのあるもやこまくれまこれに人の忘しき

いつくとて君きつゝん至うる我ハしし此ゆれなりなくて

をくる○

拾遺上
あつまのさし立こゆるあふさかまてまたみれハうらひもせぬにこゝ
をきいはうし

拾遺上
けふ人これハまちわひてまさりいへしきは須磨の海士もちかめなきされ
つゆきく

古今賀
萬代を松にそきみをいはひつる千とせのかけにすまんと思へハ
素性法師

古二十
あふみのやかゝみの山をたてたれハかねてそミゆる君か千とせは
大伴黒主

拾雲
い来て子日の松のはしめハきみか千世をひかんとそおもふ
三条太政大臣

拾遺上
松のうへになく鶯のこゑをこそはつねの日とはいふへかりけれ
大伴黒主

なかまちも初音をまつる鶯のこゑをともね里もあかぬひまなし

拾遺
知そいふる心ありしといのやまん世におりさ夜を人ハつくねハ
惟成

うくひすのねくる○も栗はなき鬼花のねをとるもらさぬかさし者

声插ゐそくろ　引寄歩勤

五十
梅花さけりさく人に寄しあれハさりしをおくるに花のいろ
拾遺
これとれハ人もこゝろをそへつれはこれをおもひかねつゝこれそ二所をおもひしるらんの
ろうきまつとれあまりきみつくりきりやとれつくりきりや
古今下
よみうたふこゑのこゑへのさんにハせは人こそはくしありかれ　ゆれ
古今上
おち瀧津こそれみなもとしつもりおいぬ・なしくれきすちなし　忠岑
拾別
あまるまにハめつらしきこゝろの衣手に心をしちくまそおもひ行　つらゆき
後撰一
萬まさくに松のうへにうつろふ人もこそおもへあかすもすきめかり　素性法師
かくはかりあまれのゝこゝろたれもかれも命をそこに歎くの・ハ
信明集
あらしく人ハ命をそとみぬまかりしとやまさりかハつえをそるの河く
拾遺
しけ川のらしみつあるかやしのゝあるやまをまよふかれ　読人しらす
まれにまれとはもろそやまれとはまてやめさしさんて

こゝろ

千載集
心から花まつされハうやされもみちとそ風の吹そまよふらむ　藤原中納言

後撰之
ちれ雨よおもやかゝろ花風や池の水きよみうつるらむ　友則

もろきハいとのこゝろす山あれや人のこゝろもや　よみ人しらす

後拾遺
あれぬとも人とやいつへきされとあれ冬の夜　安倍清行

古物名
波の花ちりくるみゆる水の春とは風やなるらむ

後撰之集
まて柳ちるらむそてとけや花ちりとけや　二條后
花ちれぬる
ふる花ハとけや梅の花ちるや

後撰四
わかこゝろたのむよしのゝ花しいつれかさしそてなきさ　伊勢

古今一
わかそれつ梅のはつえに鶯の花の音をさかぬへきしひもすから　よみ人しらす

六帖
君ならし人ハいさ山吹そろへそてかれる花になりめて

いまたり恵の山路のふかれもいりといりぬる人まとふらん

後芸下

かたりあまさ名におふ首の葉なれはそこひもしらぬいろ此ふかさう

三条大丞下

逆まひぬおもひの松のひとうこはあまいてやありんとはまし

おもひ

実明新三

神代よりいひといふなりさきこれのうるこま人をうらしまる

後宮夜

こうくれておふりかりれあやめ草なりきこそしに人はひかるれ

つゆき

とうら夜

うきしいこ思もそこ〇と蜂のこれいとうすさ力もうしけるく

後宮四

秋やとしこのむよしれ志しいらはおるしきしをさしてこれはきめ

伊勢

催馬楽

まひへんはとうちやうをもこれうる紙おほ君をしらにきんまきを

万

若代の字中にそうしすひ松ころまとけすしし　ぬまへも

猶子某
ゆふさ川のせゝれやうら夜ふかや蛍のゑん書

後恋四
うらちねのおやれよこみまもこもりいとゝくまあらうらはあふきん　入丸

しるくしまし乃ハ　引哥未勘

後恋一
うらちらされおやのいさめしうくねハ拙さよらぬの門をそ有けら　よミ人しらず

古淋
けさくもなおさしえとさへんやもろこえそハあけらは柱となるらあ　よみ人

万
うかこるとはころむ梅の花ちるを家を知らしと知りてあるらむ

されなの中にもあいあるしけるすれくくもあらうれ　行基

続哀
わけさやうをみえしこといふてるうちくそつくてそえし

古恋一
人もられぬとおもひやあるとおもひまされまちうされとも超らうれあるる　よミ人しらず

後恋二
立ちうくハうけあむくらちうされと組らあるそれきさすへらん　小八条御息所

六帖又
よつるのさはしをしめてとふ人ハくるられぬらしやさまそハむしろきされまし

よくみれはまよく此世のねぬるよりいたよはる身ひ物をあわれ

六帖
むしろてをれよきつ夜にかゝる河辺のとかの手ならひを

古今四
みしめく大河の人の岩波のあたにおもひ我こひめやも
うちとひ

よみ人しらす

六帖
知らすとのみすしく心ゆく我せこか衣すそのうらそよひして

若菜一
夜なれはやとるよすみかやとりのいつきてつき下まてこさん
のとかさ

後撰中
うへそよく[illegible]世中に風あれはとてや家をかくらん

伊勢

拾遺下
荻のゝ風のひゝへはきゝくらり秋のあわれは秋そまさる

よみ人しらす

拾雑下
荻秋するひとつれてわたくしつけつゝけりこひしき

つらゆき

後撰中
大空はあ[illegible]れ秋のまよ[illegible]のまつせし

よみ人しらす

古意四
家隆のしもとあしれかも紀家をしもと風を待と君をしそまそ
よみ人しらず

古意一
山さくら霧れ曇りの月れかもこそし人とそ遠しかるもかれ
つらゆき

後雜一
人のおやの心もやこまあらしとも子供せしこちまもひぬりな
兼輔

こゆき

いかしていかまよらんをの山のうへよりおつるをとなしのこき
行平

俳諧
おきれさひ人なとめそかり衣かしまりさうしろもなくなり

明君卷
志明くとまつそなるくかりそめれこるめハあまれすさこなれとも
よみ人しらず

新下意一
東路のみちれさてなるひらち常れかことしりもあもんとそせふ

後意六
りひぬれハ今ハるおもし雜波なるこ供つくしてもあいんとそせふ
人の心もあらんとうおもふ

春夢集
夜なれと夜とも志てすくるれ月れうれかけまかくれる

雑体?集
細川
うちむらさきのつゐわりしいまも見山ともろそうわりしき　人丸

後拾恋三
みちのくのをたえの橋やこれならんふみゝふますみこゝろまとはす　道雅

見すしらぬ後ろく見すられとわすられぬいのち盛りていつ盛なきん　兼孝
まな知らし路

忍ふるしいそてゆかんちかしき雪にかりあをに行のもかけまなきに

後冬
思ひつゝねなくにあくる冬の夜の袖の氷りはとけすもありけれ　よミ人しらす

六帖
いそ枕のこのもとにかりかすかとも我ひとりせかれすへしやは　まイ

拾別
君すむ宿の梢ゆく〳〵とかくるゝまてもかへりみしはや　菅家

雑下?
竹川のはしのつめなるやまちの森　二三句

古春之
百千とりさへつる春は物ことにあらたまれとも我そふりゆく　よミ人しらす

拾
むかしはいもつゐのひ惜そつをかれは花ちるを惜くなれ

新古意一
むしさ紀の色に心もあらぬともふくそ人をおもひ万葉ぬり
延喜伊勢
赤人
續古集下
蓋のしにすれつゝにとこしけれその紙なつしに一夜ねにけり
伊勢　古意面
よこ人志く寸
すまれおまれ塩やくなり風をいたみ世もぬかにたるひこまなり
後意一
伊勢
忠川にて寸なるし水のあれにうたかた人にあてきしめや
風俗上聖寺
とし人にもさへきねるもしれ此の玉ももまゐなりそをいも
すねやまゐなりそもや
万
立てせひねてまそせふくれなねのあもこれひきいはしすくを
續古意一
よこ人志く寸
せふともこふともいはしくちるしれ夕に衣をそめてとそこしめ
山吹を宿まう人てはうらとにおもひやまずこひこそまされ
六帖六
夕されは聖人にあくてふかなれかなにこしつまずこれなくに
古意面
よこ人しく寸
姉江こくこるしし小舟こさ人りおるし人にやこひはうるん

梅かえ

古美上
梅の花にちかうもうりありしより人のとゝむるうまそしこかう　よこ人しらす

古美上
春なるしてこれはかこはん梅の花いろをもかをもしる人うしる　友則

維る不
梅かえはさねる花や春かけてたれ二句　春かけてなけとも春こ雪はかり

つゝ三句　あたれそこゝしや雪もかりつゝ

古美下
いつまてかのへは心のあくかれん花しちらすも子世もへぬへし　素性法し

拾雜美
花の色はあらすこゝろとゝうらひすれねくらの枝はよくなるかれそも　一条摂政

ちきへのうきとゝめけ家あらくきをこゝろはなこゝろのあるれけるか　中務

六佐六まめなれと
よしさてもうき名もたゝすうるやのつきこゝろれなんしをとろもとろは　よこ人しらす

古非
ありぬやと心こゝてしあひこゝ口にこゝかれなくさまてそ立つしさ　よこ人しらす

後遠代
たちすとれこ人いつれなきうしまこそ地あらひいつくといふなれ

古志四
いつとりとせふもれかこ今さこに夜ゝ夜ことをかまれいこれまん
（よこ人志ふ）

荷のうら葉

俊勝
人志れぬけかわよひ語のをさまりはよひくことに打もねなるん
（つゝゆき）

後甚下
君よくにともれてふれは荷のもれこそれ時も志られとりなり

夜よこそ咲かりなれふちの葉松よとのこも却もひけるな

後甚下
甚日さ寸荷のうらもれうらとけて君しせもて我もこれまん

新古志一
いくらくも咲ちる花紙なるあつ拘せひくらして甚よおふらん
（能宣朝ト）

催馬楽
あしかさまかさかさ多てでふ寸とおひ寸とかれ二段てふ寸とこれ

これこれと紙おやまおうようしけしも三段とろけりこれ家この瓶

のをとよめおやまおうようしをしも四段あめつちれ雅もかこも志ふう

志くへまれはまうよしまう寸五段深れねのすかするさこと紙

まれいきくまれいきくかな

新古長下　新古くれり　つゆき

みどりなる松にちきれり散なれとをれかころとそ菊もさ紀なる

清後長二　伊勢

玄しきにしぬる柚といきるひとも世れくあしにもなりぬへきかれ

確る系

かくられをきれあらうきやせきれあらうきやまもれともまれ　二明

肉もれともいてくまれぬやいてくまれねぬやせきれあらうき

伊勢集

玉すくれあくるも去てねし柚をゆめるまくしとおもひけるかれ

ねくれの朝かれ菊秋きりにおもかくしけくしぬきみかな

伊勢

なとそうくあふてかくこゝになりにけん水もしきしとむすひし柚を

よこ人しら守

清雅二

うれしきもうきも心もひとつにそうれぬもれいなうくなりなり

せひきやきみか衣をぬきうへてこきむしき紀のいろなくんとい

うへしかりなくうそけくきくなれいまとこしてや家もをくらん

古表
君かうへし一村すゝき虫のねのしけきの人とをなりにけるに
我やとれいさゝふ川のまし水のましてそしふきみひとりなき
後
打きへてかけとしられむ岩の松いろとりあきれか務にもこ川か
古秋下
秋をしきて時こそ有々れきくの花うゑしうゑしにいろのまされは

ほうれ上

伊勢
世中にさしぬほうれのるくまれちよりとなけく人の子のこゝ
後雜一
人のおやのこゝろやこゝにあらねは子紙をしふこゝちに夜とひぬるに
兼輔
うねてよりつゝきを君かるゝにさてにはうまれをおもひすりかな
人の世の老をもてにしせましふかふにあすとなけきしまし
後悉こ
我こゝあはいとゝあさくや奴ぬらん雪中れ志ゝ あつさまされも
よこ人しつす
人なる紙人そさくなるゆめにさこ人のなるとしきくこゝろかな

拾遺
春日のしまるらねと思ふあとしれかすをもつまんとそせふ　伊勢

催る系
春柳をかくいとよりて　こてふまこ面

業花物語
うそへ三つ人なりせいおく山のこまれまりとやとしをつまし　法皇御在所太政大臣

催る系
まひへんいとりちやうをもこれこう　もくきくまこ面

いかまかとせふこころのあかとさはけう身をしきて人そかるしき

古歌下
春の雲のやしいあやなし梅の花いろこそしらねかやそかくる　こうす

後冬
ろきして雲まこころあいかいは梅せふ人のこころなるなり　かけりと

後冬
ふりそめて友まつ雪いむそむのけうくろうこれかもるなりなり　つゝゆき

古歌之
おりつれい袖こそまほへ梅の花ありとやこくまうくひすれなく　まこ人出し寸

後拾
梅かゝを梅の花にまかまきてやなきか枝まさせてしかれ　中原數時

古
せれうきあしぬ山路へいくんまいせふ人こそほくしぬけれ

後雅一
人のなやのうろはやうにあしのともなほ世にふるに海とひぬるは
　　兼輔
　　うゑ人しらす

後慈二
なるさ名そと人にはいひてをぬ人し心のとけいしこゝろん
　　うゑ人しらす

古慈三
むしろ名はこちらしもれ今更にことなしかとも志しあらめや
いつゝなるさはれるの松のくもれ木もちえるもれて地をこそ世人
　　文屋そ名

後恵中
恵の池のむまにあそふに何名はあしはいとなるさこひもするれ
　　うゑ人しらす

古慈三
こりすまに文もなるさ名は立ぬ人し人にくらぬ世にしすまへを
　　つしゆき

後拾恵下
さかさせとふるさも志しぬ例なれは文をも人も志しとそ世に

伊勢
人志れぬ口かなひ海のをさまりはらひくことにうちをねるん

伊勢
けすらんとせふ心のうるかひにありしらりけにもれそなるさ

伊勢
志りや志川志つのをるまれくりく人し昔代今になすらしもれ
白家はうつしなりそりを馬の其葉は山のいろつくれを

恋四
秋やくるむらしのまたしつくおもしろきをしきそふそのゐ　伊勢

催馬楽
むろかやむしろくれはゆめ河にやとむつみ　二明　をとむつ家のや

をむつかのふたせをまそてそおもひおくる萬代をこそおもひおく　げんひんろうぐ

とうかまはくみなと清しけき船のかちはすまめあきれなと　うた人三つす

拾和名
ありもすてゝ山にへつし秋あれはくもの(?)しけれとも切はつしも　うた人三つす

古今一
さふなれは思もきそめあし山のかすき心を人もしらなん

世中は夢のうきはしうちわたしつゝあれをこそ切なく

やまもゝかつく地のそのに待あきてあるれなすかの船に

吹風も心しあらは花のさくしらしくたちてちゝきはしるらん

久かたの月のかつらも切はかり家のかせをもふかせてし家

万葉六
うちはまはかのかりそめなりせは　ちくい　くれあけはなくんとそまことに

古恋一
ミずもあらずミもせぬ人の恋しくハあやなくけふやながめくらさん　業平朝臣

まくれ下

古春下
けふのミと春をおもはぬ時だにもたつことやすき花のかげかハ　ミつね

古秋下
ちはやぶる神のいがきにはふくずも秋にハあへずうつろひにけり　つらゆき

拾秋
紅葉ちるときさへくれ山ハ嵐の音ぞや秋ぞくれぬらん　能宣

ひるさへハ我の心ならけりくしのくれ山さへゆふくれてしも

伊勢
秋のくれちる紅葉一葉にまかへりと色ことごとのこえてやなるらん

恋の紙風のふくりまるくへてそうく思ひさまさんとある人に恋る　貞辛妃

万
春されば風にまかへる春柳のえだれて物思ふなりけれ

よそち恋ハふるみ人恋さへ人ふれさへ人枝まだ高くせけずもしとふきハ此木

雑下系
らふくれちそれまへなるやふくれちそれやすしなるや　庭
ハのきれふらん

しろくやまちしむしろくやをしとんとをしとんと三昭してハ図ぞさ
えんや、まいぬしぞとこえんやなしとんとしとんとをしとんとをし
よゆかくさきあるといふなりありそ海のくろしら波もおなし一あは
小町集
人しれぬ我しふ人にあらぬ我ハ身さへぬるこそおもはゆるかな
古新上
ワうろうちなくさめかつさしるやをハすて山にてる月をこそ
古
ゆやふ
ゑしちなく無かみへくし世中のうつ○なきもれといひハちすとも
古志一
よこ人しこす
夜むしの身をいろくにちすことをひとけしひにうりて成さるを
古秋上
よこ人しこす
まれまよりもなくろ月れかけこれハ心けくしの秋さきにかなを
古新下
こちのく
あかさりし袖の中にやへにそんとうむしぬのちさうちする
古恵下
よこ人しこす
まてといふにちてしとまり抱ちしハちまをさくらにしひまさまし
伊勢
られそこそいとくさくらハめてこけ見うさ世に何ろしうくる

哥
夕やミハうちとくし月まちてくれ新せこそのまつもえん
いりそめし恋の山路のふかけれハへとやめる人まよふらん
夜の日も経すこあり抱紙なと見えるひのひまあるらん

拾恋五
あはれともいふへき人ハおもほえて身のいたつらになりぬへきかな
一条摂政

後拾恋四
逢しされうきハまよひし抱きしハ文二夜ともちきりしや
大弐三位

古雑
冬なから春のとなりのちかけれハ中かきよりそ花ハちりける
ふかやふ

古雑上
さゝら海ハ年もゆるかまあへともいろかはるらんひやともまくらと

古哀
ありきぬハゆきかひちとせひろし今ハかきれなそてありなり
うしきま
つらゆき

拾恋五
大かたハわかひとりのそらこまなくての世をもうしとつらぬ
うくも世にはかなくるもあはれもおもはれ松なるなくる

古恋一

夏むしの身をいたつらになすこともひとつおもひによりて成けり

よみ人しらす

古恋一

涙川まくらなかるゝうきねには夢もさたかに見えすそありける

よみ人しらす

むすほゝれもしんなつりもいつくきえてはこめしあさきちゝらを

人の世のおもひをそへてしせめしらくなつあすかとあけゝらしつゝ

恋しきにわひて魂まよひなは空しきからの名にやのこらん

伊勢

おもひあまり出にし玉のあるならん夜ふかく見えは玉むすひせよ

後雑一

人のおやの心はやみにあらねとも子を思ふ道にまよひぬるかな

兼輔

新古哀

末の露本のしつくや世中のおくれさきたつためしなるらん

僧正遍昭

古雑上

つらしもあはし我身をすてまくあはれろまにちひらくゝ

よみ人しらす

とりとむる物にもかなや世中をすきしふかれ我身とおもひけん

よみ人しらす

古雑上

あつさ弓いそへの小松たか世にかよろつ世かねて種をまきけん

後秋下　月日れゆくもしらさりつ

抱しふとしらる月日もしらぬまゝ所にてなきて秋と告かれ　よこ人しらす

恋しさはうき世のつゝ歌ひをこゝろはなきそれなりひけり　よこ人しらす

後朝二

うれしきもうきも心はひとつにてまれぬ抱しなるゝ歌かり　んつけつゝを

古袁

深草れのへのさくらし心あらんことしかりかすこそめるさけ　よこ人しらす

古袁下

恵ことに恋のさりはありなめとあひえんことそいのち歌かり　こんるれありつけ

古袁

君がうへし一村すゝき出の○れしけきのへともなりけりかな　よこ人しらす

古袁四

いせのあまれあさなゆふなるつくてふこゝろめに人をあくよしもが

よこ人しらす

よこ人しらす

拾雜恋

かふかともあすともしらぬ白菊れしらす我世をふへき我身そ　よこ人しらす

拾雜之

世中にあらぬこゝろもえてしかなとしかりこゝろくちかくさん　よこ人しらす

古袁下

恵ことに恋のさりはありなめとあひえんことそいのちなりけり

右雜下
今さしに何おひいつくん竹のみのうきふしきけき世とハ志しすや
こゝろれ
こゝろれあり事
右長
志りうへし一村すゝき出の○れしけきのへともありまけりかな
後拾雜一
なきへハをとつれもをてことれをくらし月日そへりきるなり
大納言公綱母
あきちかれ小藻の葉にをくなそ世れうさつまとしひこゝろく
遠しされかきりこゝあるせありせいつくきもしねてなけかさしまし
右秋上
白雲にまを○うちかしとふかりれかすさへこゆるあきれよれ月
よし人しらす
秋風につし紙をなれぬりか○ハ其をくるともへくらさるん
心まハ下りあれワきくりいきてしふそいふまきれ
右意一
くるいと紙とるるなるまよりかけてあるすハ何をおのをまをん
よし人しらす
催る系
いりとれとへされ山の山あらきてなとりかれそやかくまきさう
やくまきうくや

古秋上
かくたりぬしとしふ夜代いろこゝはてあるすらん人さへそうき
ミツ子

すゝむし

古雜下
ありそてぬ命まつまれほとたりうさすきけくなけかすもなか
平貞文

後秋中
いつとても月こゝぬ秋ハなきまれをしさてこゝろひのめつらしきれ
若原まさこ

後夜
笠多れいろともれともいろこゝは抱うかり力をすくしてのこなり
雅正

後春下
あこゝまれ月と笠とをおなしくハ心をれらん人にこせたや
源信明

花山院
心こゝはかの月をもこゝしかれわやとゝこれあそれなかと

あつま語のなしその関のよしこゝ多なまくいくへき我力なるらん
こゝらくゝ女

拾忘こ
ちかめや家山色ハいとくかすこゝろおほつるされまさ家こゝろか
徽子女王

新古雜下
これ人のそむこさそてぬる世中にふるれやしろれ力をいなまん

夕こゝろ

千基下
ちり菊を分まうふさりおしめともなりてとしれ老まけりかれ　加田法し
後秋下
日くらしれこしもいとなくこさしゆりはあさ夕くれまなれを妹けり　つゝゆさ
古秋上
我のこや衣とおもりんこさりくすなくゆふけれやまとなてしこ　よこ人志し守
大和物語
志ひとてやこをもあへをはやらりてしいといさかこ紀こちこそすれ
神楽歌
それこ雨そや我まれまくさこふくさはどりかりんくつはどり草はどりかりん
後院歌曲
君こふり心をちらまくさくれとひとつをうきぬれまそあり名　和泉式ア
もろとをは君をほさなんぬれ衣かううき名を我のこそこけ
なき名そと人まはいひてありぬへし心れともくいりこうへん
古雜下
あかさりし袖の中まやいりまくん我玉志ねのなきこうちする　こちのく
古雜下
男をすてくゆまや志まくんせふりほかるりれをこうろ妹かり　こうね
秋の野まかりそくれぬる女郎菊一夜をかりれやとまかさなん

主意一

心にハちへにしへと人にいはぬ我恋つまをこんよしもかれ　人丸

かねてよりつゝさ紙にれにならハさてにハかにもれをおもはしかるを

古排

人にあハんつさのるさよハちひをさてむねをしるひに心やけをり　小町

古秋上

日くらしれるさぬるなへに日ハくれぬとしふハ山のうをにそ　よこ人しらす

いかにていかにようらんをれ山の上にるにおつるをとなしのこさ

身れうさ紙世れうさとれこなりむれハいかに大そらくるしかるらん

古別

命たに心にかるふもれなしもなにかれのかるしかしまし　しろめ

拾雜意

風をやこ岩のくにて紫れとをすれハあやかりやすさ人のこころか　よこ人しらす

方

夏にくに行をこしすこもれとも我かをまにふこひのしけさに

古別

命たにこころにかるふもれなしもなにかれのかるしかしまし　しろめ

古意二

秋なれハ山とよむまてなく麻にこれおさしめやひとりぬる夜ハ　よこ人しらす

秋のよれ月れひろしあるれをくらふの山をこらぬへらなり

後表

なさ人のかけたまこらぬや里水のそこまなるをなりしてそこし

伊勢

いかなしていかなよらんをの山のうへよりおけ家者なしの湖

かゝ方まおほしそそんたらちゆれおやさへつらさ恋をするな

新古恋又

ひろはきてよりハ見ゆくやまとりれかけうり時それをあるれかゝ

よこ人しらす

古誹

ありぬやと心こそてらおひこゆハくゆをふれてくさまてを恋しき

よこ人しらす

いひこそハさゝ石かおしき志るれなり本当衍の橋のかけしてまへ

この里

拾表

法花経を見るしことはこそくうなつゝあくこつくてそえし

行基

古恋一

山橋かまこの男より得のうまをこそし人こそ恋しかるれ

つしゆき

古恋上

もくちとりさしつゝ恋ハ物ことまおしたまれたを見れをかりゆく

よこ人しらす

拾遺秋
秋ふくはいかなる色の風なれは身にしむはかりあはれなるらん　和泉式部

やくもをはさしそめへにさゝまくまほひろくらやの雨　泉式部

後拾遺二
あかつきの露は枕におきけるを草葉のうへとなに思ひけん　高内侍

後拾遺二
かくまいちとせくもと心ちして我は涙にひちしかりけり　藤原隆方

拾遺
くらきよりくらきみちにそへぬへきはるかにてらせ山のはの月　和泉式部

古今
うつせみはからを見つゝもなくさめつふかくさの山けふりたにたて

伊勢集
よりあひてなくなる声を糸にしてわかるゝなみたをそ玉にぬかなん　伊勢

後拾遺
いなせともいひはなたれすうき物は身を心ともせぬ世なりけり

新古今
末の露もとのしつくや世の中のおくれさきたつためしなるらん　僧正遍昭

あくれの咲へとうしとしらへえやうさ日の草と人のなるらん　よみ人しらす

拾遺一
花つくとこされふたゝはくしてさそふやわかれなるらん

まかろし

後葉下
いつくとも葉のひかりはいるくまさくこよしれて山をゆきくゆる
なゆきくるくるゆくしの白ふくん葉もてたやせ窓をとるくま
よこへしらす
りとすけ

拾雜上
うきゆきはけかれなてかきくもとゆるはこれかまもあるかな
あすか川心れうちはなるれはそれしらしみいろかとまん

古表
すゝそめれきみかゝ女もとは雲なれやこしすなるこれ面とのこゝろ
こゝろ

拾雜葉
こちふかれ白ひをこせよ梅のそれあるしなしとて葉をつすかな
菅家

古意一
とふ鳥れこゝ色をこさてぬおく山のふかさこゝろを人をしらるん
よこへしらす

後葉中
大宅は相伴ふたりの神もかれ葉さく葉をかせよ御かせし
よこへしらす

古表
夜もかもむかしれこさは白へとをうへかん人のかけそこひしさ
つゆさ

古雜下
光なさこゝろは葉をよそなれはささてとくちる抱しひもなし

世中ハくるしくありになりあるくくるしく思ふなるらし くへつけれこそ恨

古哀
かくされ世人のさくし心あしハとしてりハすこそあるに見

さもこそハよる人のあまけさしめ名されおもひをワするへしやハ よそへしす

後恋
名人め蕊くち蕊にほとしこそすみ世をなしきろ声こそあり

ひとりしてもくハるしこき時るいまのかさるにまをとあるせそや さらおれひとて

古恋四
大そらハ恋しき人のかたミかハ物思ふことにちなかめらん

いまの人のこころへしへをほとこそすいまによりてかろこ思ふあるく

六帖
名るしきそもまさるにまさる人の力にいまに物ほかりあるくくちるらん 伊勢

古秋上
我のミやあハれと思はんきりきりすなく夕かけのやまとなてしこ 素性法し

秋ハなほ夕まくれこそたゝならね萩の荒そよめきし こゝる

我身にハあるしことゝもおもふをそてとも思ひさりけり

後表
もろともにおきねし秋の家たりかたんもれとしひかけさや
生上釣卜
秋無月いつもしられはありしかとかく雅ひつかはりはなりこさ
やれはおしやらはは人にこらぬへしあくなくもうへまされり
かひなしとしひなきひそ水くきれ給はちらせれそこなりかり
あつくての釣卜
後冬
袖しふとすつ月日もしらぬまにとしもふまそぬとうさく

まつふ宮

まほふれ君おもほゆる茎なれをかつらしつくまれろぬれぬる
そせい法し
古秋上
夏しらぬかくそまほへれ秋のくまこらぬきかけし萩ゝうゝ成をも
おこんしらす
古玉上
梅の茎こちらうたりありしより人のとりもりうのそしこかう
月
古秋上
秋とき紙しらしこふきてなく庶のめにはしすて春れさやけき
こうね
古玉上
春のよれやミはあやなし梅の茎いろとそこしはかやもうつく

求子
やどとめハまつやどとめそころやどとめんころやし女二明 仲のまつ

これこやしろ

紅毒

古長上
君なりてこれにこそきん梅の花いろをもかをもしる人そしる

左則
根ての後さへ人のつらかしもいかりいのてかのをもなかりし

後長上
これなわのいろにこれて梅の花かそことくにに消ぬさりかり

三子

後長下
あらしこれ自ご花ら紙おなしくハ心しれらん人かりこきたや

源伝明

竹河

古長上
ちこりも香こそ衣とおもほゆれたゞ袖ふれしやこれ梅そも

ちこ人しつす

催馬系
梅かえにこそあり鶯長かけてこれ　梅かえ三首

催馬系
これとれハむへもとみやりこれくこれあれこれくこれこれ

初春

催馬楽
竹川のもしのつかなり菅それは　そのねは二首

古賀
梅菅ちりかひくもれ老しくれこんといふなりみちもまふかな　ありひし

後宮
菅島のいろをもねをもいろしは拙うかう男もすくすれこそ　雅正

古来上
さくしかは衣もしつくそめてきん菅れちりなん後のこそこうり　これありとも

後来中
大宮におほふちりれ袖もれちりさくちるをか猪にまかせし　よこ人しら付

後後拾遺四
男をつくそなりこらぬ世代さう人はひとへに人をうしみさるん　よこ人しら付

こしもりとしひつくそてなりしれはつしきも人の表とそおもふ

古来
恋しなはなか名はなしし世中のつねなきもれといひはなすとて

催馬楽
竹川のもしれ　そのねは二首

古来上
菅れ菅れやこはあやなし梅れ菅をこそこそねかやはかくなし

催馬楽
いられはむへまとこそり　初音は二首

引三十四

拾雜上
世中をくいひくのそくはいかゝやいかゝなるんとすらん　よそ人しす
新古恋一
あつまの浦のなれそてなりひさちおひのかとはりもあいんとそ思ふ　よそ人しす

もしひめ

憶家の記
こゝろ石のおもてに物はかくさりさふしのやうしはつゝもさらめや
大和物語
なき人のすもりにくにもなる人を紙今かとくゝかれなるしさ
大和
雲ゐにてよをふりはてゝありまれあれはこそいけるかひなさ
月ふれひかりにきまりを足引の山をなりてと紙かゝすとも
百雜下
馬のくるこゝ○れあさ青されはれとおもひつきをぬ世中はうさ
拾表
ふよりは家れいのちもおしかゝすとちすれう人のこ海とちされは　実方物下
古雜下
ひかいかは都のうちをしかそはむ世紙うちやまと人はいふなり　きさん法し
うもそくかをこなふ山のさねかなあれそもくしさこうしあらねそ

古秋之
ぬしまつらぬうそにほへれ秋のくにうちぬきけし　そせい
　　なさう国そも
古雜下
世にふれいうさそまされこゝろしれ君のけはふこゝろしてん　よこ人しらす
俳勢
手紙おりてあひこしこゝ紙かそふれハ十といひてこゝろハ色にかり
六帖
うら川のひとれこゝろねハねどそなくあしろもりてふ人れつゝさに　よこ人しらす
古意四
さむしろに衣かくしきこゝろひもや紙をまつらんうられしひめ
はすきほのしろくにぬるし地ゆへに分さへうきそもおもほゆるかな
詞雜之
ことれねに置れ松風かよふしいつれのおりしらへうめ望ん　秋文女
秋後雜下
ひとへこゝにきりハかるしきふち衣かさなりあさ紙しひやしなん　兼輔
古雜之
かくちこそこゝやまかくれのくちまなれ心を高にあさはなりなん　けんけい法し
かきつくる詞ハ手手もきぬへしまれもしふ人やなるらん
しらうりと

古今よ
早まつしまちか積の中にて人もすさめぬさけり　よみ人しらす

桜さくゝれ山のさくらゝちるさくらあれはさく桜あり

いなむしろ川そひ柳水ゆけハなひきおきふしそのねハうせす

催馬楽
さくら人そのふねちゝめしまつたを　らすまよこゝゐ

後撰
我やとのむめよみまちしハおなしくをさしてそいさる　伊勢

続古今
春の野にすみれつみにとこしわれそのをなつかしみ一夜ねにける　赤人

河海
わかそてしも何白ん秋の野ハみれともあかすめくおもかけに　仲正

後撰之
あふこちの代さる人すくてまそてしる関のしるへハ見ひしかりけり　上東門院

後拾遺上
いひやれるすこころめくる山さとに花ちるつほとれちりつれく　よみ人しらす

後撰上
松もしれ袖のあれさふ秋風ハ吉野山よりふきそめてめくなり　よみ人しらす

古今之
ひみさちひいりくさひしかハられまかへてちる散さん　よみ人しらす

古哀
つゐにゆく道とはかねてきゝしかときのふけふとハ思ハさりしを　なりひら

あけぬれハ心あるしやとおもひしにおもひさりこそや　業平

古二十
さゝのくまひのくま川に駒とめてしはし水かへかけをたにみん　友則

後秋下
こゑさへすさましきたる人さへ秋にさりけ夜深とりきゝ鹿まねくねと　たゝみね

古哀
藤衣はつるゝいとハわひ人のなみたの玉のをとそなりける　よミ人しらす

古雑下
露のくろねの鈔こそうらねまそのこさひつきちぬ世の中れうる　僧正遍昭

新古哀
末の露もとのしつくや世の中のおくれさきたつためしなるらん　よミ人しらす

古雑下
世にふれはうさこそまされみよしのゝ岩のかけみちふみならしてん

伊勢大輔集
おく山の松葉にこほる雪よりも我身よにふるほとそはかなき　小町

古恋四
あまのすむ里のしるへにあらなくにうらみむとのミ人のいふらん　宮田草春

後拾物名
秋おもひのこむらか岩やとりかゝれ立田の川のなかれなるらん

古序
あさか山かけさへみゆる山の井のあさくハ人をおもふものかハ

古秋下
わひ人のわきて立よる木のもとハたのむかけなくもみちちりけり　僧正遍昭

うちそよくをこゑかな山のこのおもりとおもれそいくしここにしあれハ　人丸

拾新雑 17
かけ七ちとせよ草かきれこきれかそおもつもおもかけさきみを海くさにきん

拾哀
しなてるやかたをか山のいひにうへてふせるたひ人あはれおやなし　聖徳太子

心巻二十
山さくらつほみあかりは見えそておもしろしをおりてけつれ　白髪

あけまの紀

古恋四
身をうしとおもふにきえぬ物なれハかくてもへぬるよにこそありけれ　よ人しらす

万
ときあかうえそれこゑもうちとけうむ時なしに恋わたるか

倭撰集
よりゆきてあくかれにし心をはかへしてけるをは海にゆきなん　つらゆき

古雑
気まよか物とはなしにわかれちれこそかはさくもおもほゆるかな　あしく　ろく

催馬楽
あけぬとやかへりかへりかへりてわかれとも
かひあひあひかへりかへりかへりあひよかりけらく

古恋一
うくいすのなくなきさまりけてあかすハ行秋の夜のなかきを　よみ人しらす

古雑上
うちしくれてふる山のくれの待本あはれふるハ蘇芳はなはあかりけん　けんけい法し

古秋下
ちらひ人のいさて立よる木の下はこれむつけすくみちりくる　僧正遍昭

拾下集
ちれ庵さけれ人まよ水をやつし松の葉かる時ハあはれとる
おく山のそれぬ時雨てまひ人の袖のいろをハいとゝましけむ

古恋一
あさきぬ暁わかれ別にハこちさへまらよれこそなけれ
となれしやもさえておく山のかさこころをも人もしらなん　よみ人しらす

後恋又
よもすからつきのいけ袖をおもひしくおもはゆかれ
いるせともいひなくれもうき袖ハ身をこゝろとしもゆせなりて　伊勢

拾
世中をうしといひてもいつくにか身をはかくさん山なしの花
忘らるゝ身をうらみぬまはちもやおもひつゝてふるぬまとに
古恋三
あしともいひそさてぬ昔よりあひきこれ秋れまつるれ　云々
万
わきもこのちせの山のちまてふあかんなすそふあすとと
大和
君なくら人しとみすはあさみれうらみ身もおけりへきこちらてすれ
露はをけと秋やもれ萩かえはうくてそ秋をまつかなるれ　藤原きよすけ
古秋下
おなしえにてあれもれらいろふかうしてそ秋のそらしめ嫩なれ　よみ人しらす
古恋四
わかなくこゝろうくしらす小舟こきかへりおなし人をやまたまちわひなん
古誹
秋れはおなしうくきそうをまちあるかし吾色一とに
後撰
ひさしくもあかれぬるそのなしきはかへれまへおつり嫩なり　深養
あかしはとと山なれぬもあかすあはすてと夜あかしいつのか

百

ワ草のまゐ手拾をまゐ紀そめて衣をやへそんまつゝあらるゝ

六能

世の人のこゝろくまゝ々れハおもふもつゝしうさハこれまゝ

拾衣

世中を何に毎とへんあさほらけこきり舟のあとのしらなみ

満塹

初しくれふるの山さといふるゝんをむ人さへや袖のぬるゝん

古能

ありぬやと心ゑそらあひこねハこハむれまくさまてそ恋しき

よこ人しらず

古志四

夏ゆくにこゝ也とハこしし釣なくまゝにもけまもつゝ物なれハ

いせ

後秋下

うち山の紅葉をこすハ長月のすさり日をもしらすそ何らまし

ちかぬかめ

いるれハあふこの海そうつてふ人をこゝろめのこゝてあひねそ

横子秋上

七夕のあまのそ渡るこゝろひさへをちるゝ人のつれなるゝん

よこ人しらず

もみちゝのなれてとまるあしちよハ白なゝもまゝこまゝぬ日そなき

古志四

そ人ハことのこそよさ月草のうつしこゝろハ変ことにして

よこ人しらず

とりへまてまつをもるや世中をおもひしるらしれわか身ともおもひきん

伊勢
うつりゆけはかけふるわか玉を人のむすへることもしそさむ

伊勢
わかためのためしとなしきことゝれそそこらく物思ひおもひけるか　蝉丸

新古雑下
世中ハとてもかくてもおなしこと宮もわらやもはてしなけれハ　よみ人しらす

拾遺二
こゝちよれおやれはなしうくれハ物思ふ時のわさにそありける　つらゆき

古哀
あすしらぬわか身とおもへとくれぬまのけふハ人こそかなしかりけれ

岩くらの山ねのいほをむすひあけて身のうきめしるそ命とそしるか

秋の月いつもしられぬかわりしうとくらく袖ひちかわりハなりけるき

海
おもへともやまれ里のまひしきハさそさやすくなふ人そなき　人丸

拾遺四
これを人のあしかわ舟さわりおほみよふ人まおもくはつかすかく

みこもりてなられへてなくしへつゝおもひねあかれつゝそかく

古衣
うつきこはかくに伏こつこもなくさころあくされ山をかりこれにて、
猛衣
山ちれ入あひのうれこゑことまをふもこれぬと思ひてなるしき
ちりひつることれあまくるは成ぬれはあくのやしろもみくなれぬるん
いりて祇つれなき人は身をくてくるしき物とおもひしらきん

さしらひ

古類之
日れひりやふしワれはいそれをふりましきとに茶もさ泥なり
後文
茶とりれ文をもねをもいろこは物うりる身はすくすれこなり
あくしきとしともいそすふる物は 下句未勘
古去之
茶れ夏れやこはあやなし梅の茶いろこそこゝねりやはくるく
立しくはこそもみよし人つてまいもきれ森れよふことりりも
古類下
いきこうまワ世ひへなん菅原やふしこれさとれあれまくもおし

傳教勝延
よこ人しらす
雅正

古今上
悲しさにすてつるいのちは落なき墨をすこやなくへくる　以也

拾遺
かきりあれはけふぬきすてつ藤衣はてなき物は涙なりけり　道信

千載集
花は久れつゝ虫の音すゝれぬ暮まし涙にしられてこそ　あさひく

古今又
月やあらぬ春や昔の春ならぬわか身ひとつはもとの身にして　業平

古今
め日まつ恋にちる恋の紙けハむしれ人のうへのそらにすむ　よみ人しらす

うくさみくさまさての池のねぬなはくれはそのまゝあまた袖にそかけつ

拾遺又
大かたはわか身ひとつのうきからになへての世をもうらみつるかな　つらゆき

後撰
心からうきたる舟にのりそめて一日も浪にぬれぬ日そなき　小町

詞花
思ひとられいつるすまひせちきりなんむしのね世こそ夜はゝしられ

いのりつるいのちそはつなきを川られしる跡にも浮るゝわかやと

續古今
これ程はむへもとみなるを　ゑんねう

とりへとも物をもるや世中をありしにかはれ我力とそおもふへ

万
忘れてはゆめかとそ思ふ水かくれに舟わたす波のうへにさそふなる

拾遺
あさぢ原ぬしなき宿の独寝心やすくやうきをなくらん　貫之

やとるも其

俳諧
なにとてかくあすかゝみをなそへてとゆすひしをれを

こゝろからつくな浪あさなく〳〵いさて儀をまれをおもふきみかなれ

あさかはいつのまにさはれ秋なれやあらはさるそつらひまさらり

拾秋上
なこちなくへしうしろそうすかはおとろかしそかりと云へ　かきのもとのひとまろ

金葉一
うれしさをそこをとれなるにもあきの稲を待ほかる家かいのちをそ　皇后宮別当

古秋上
里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまかきも秋の野らなる　遍昭

古雑下
山里はもののさひしきことこそあれ世のうきよりはすみよかりけり　よみ人しらす

古雑下
（つ

古雜下
いくよしもあらしつゆをちそまくあまれかまはせひこうらく
よこ人しらす
元良親王
おほそらは身をたにやとは入もの紙くもれよそにもすくる君かな
古雜之
わか心なくさめかつさらしなやをもすて山にてる月をこそ
よこ人しらす
拾雜意
洞川あまされもやしさらへのまくらはうきそとまらさるらん
古雜上
我心なくさめかつ　見上二
後意二
ひとりのみひしきまくにおきぬつ月を哀といふそうねぬる
よこ人しらす
古意之
ちりしともせひそもてぬむしりあふ人かれ私のよるれも
こつ
平貞文
古雜下
ありもてぬ命下まつまれほとちりうきことしけくおもはすもなか
古意之
うりすまは文もなきちもしぬ人しくなくかぬ世にしすまへい
よこ人しらす
後意ハ
いちせともいひもなられすうき物いふ紙心ともをぬ世なりなり
いせ
古別
えそしらぬ今こころこよいのちあらは我やはすなく人やとをぬと
よこ人しらす

後拾一
何よこれへこれつめ代りきくさんおもふまゝ代りて身うして
古秋下
日くらしのなきつるなへに日ハ暮ぬと思ふハ山のかけにそありける　よみ人しらす
恋しくてねをのこちけてさくく人の枕のさてにあまたそ怨するら
世やはうき人やはつらきあまのかるもにすむ虫のわれからそうき
言ひ出しまゝにいとふるや世中をありしなから代り身とはしらん　敦誠女
新古恋五
あるかり日ハ人のさためぬ物なれやうつくしやさらぬはなれたれ
身をうれハ恨ぬ物そあすそもくらとちりさくぬつくさらん
拾哀
うきよりも明ぬ物ハ身妹なりけりやさしきも水代おもふか　中務
古恋四
いそ人ハいとれるてよさ月草代りし心ハうつろひにけり　よみ人しらす
六帖
人されハ我をてさてきまれちめつ代るきをしも何これつらん
拾文く
まろ代下やすみぬそひつハあつら代るもありくさつり　後西園寺入道太政大臣

うくも世の中にまゝくるゝめかねつるもとせの松ちかふなく

あしきれかちりにあつ世なりせはつらきをもおもひてなけかさらまし

あさひぬれをさかちなんいまてゝのこゝろあらんをとゝめし里

伊勢

恋せしとみたらし川にせしみそき神はうけすもなりにけるかな

後撰二

むすひおきしかたみのこたになかりせはなにゝしのふの草をつまし　兼忠朝臣母めのと

とふへすかれあまゝまさりせゝし中まされかくゝん

詞花秋

秋くれはいかなる色の風なれは身にしむはかりあはれなるらん　和泉式部

古今下

かりのくる峯のあさきりはれすのみ思ひつきせぬ世中のうさ　よみ人しらす

古今下

いかならん巌の中にすまはかは世のうきことのきこえこさらん　よみ人しらす

拾遺八

大かたのわか身ひとつのうきからになへての世をもうらみつるかな　つらゆき

續古今

い世のうされるつれゝあしまゐ

後新一
人のおやの心はやうにあしたとも子にしたしかるは雨とひぬらん
兼補

古去上
おりつれは雅こそにほへ梅の花ありとやうにうらひすれなく
うこ人しらす

新古去下
うてこそうへかりけれ万代をかけてにほへ家の花なるへれ
更新作製

續古示
あなたうとかふれたうとさや　とゝめにこゝ
夕されはのへになくなるかな鳥のかほにてつゝますられなくに
人丸

あつま

新古迹一
つゝき山を山しけ山しけれとしひ入にはさしらさりけり
源重之

後拾拾
あふまにてやしなされたる人の子はしたたそこそ拾はいひけれ
うこ人しらす

古新上
焚りけん心そつゝきセタのしは一度あふをあふかな
おきかせ

古新上
むしたれの一りとゆへにむさしのゝ草にしられかゝあけれとそうる
よこ人しらす

後新一
ふそけり人の心のうきしのあやうきまそもふみこゝろれ
四条の息所女

拾遺 大かたは我身ひとつのうきよとなりてのせをもとうしとつるか

つらゆき

俳諧 魚をしとうくしし川をしこそき神ハうけすまるりにけるか

俳諧 大ぬきはひくまあまたに成ぬれハおもへとえこそこれまさりけれ

俳諧 大ぬきと名にしそこそれなれてもつねにうるせハ見てふもれを

ひこ作しに魚ハまさりぬ天の河へたつきさ代いまもやめてよ

つきもこうこさてハより立ま紀をしらそもむつましきゆりとしへハ

よみ人しらす

古意一 とふ方れこ恵もきそらぬかく山のかつき心を人もしらなん

今すなしぬ身にハしひのなれし人なりくにぬるしそてかな

よみ人しらす

古朝下 いかるしん岩洞の中にすまハかハ世れうきことはきてこさしん

よみ人しらす

新古朝下 ぶさんとこれめしことも此地をなき名をそくしにまされる

心にハ下ひ有れまきへりいそてしかそいかにまされる

かはほともなくて明ぬる夜の更はあかひてもあかぬ心ちこそすれ

拾秋
うつろはんことたにおしき秋萩におれぬはかりもおける露かな　いせ

拾雑上
世中にあらぬ所もえてしかな年ふりにたるかたちかくさん　よみ人しらず

後雑一
人わたすことたになきを何しかもなからの橋と身のなりぬらん　七条后

新勅撰
くりしくもかりくる毎に帰る紀にかれはてゝよ都もあへるま　よみ人しらず

續古今
あつまやのまやのあまりの　よみちの縁に　人丸

拾恋五
さよふけて地をたてゝひくことうつすしかすかなれと一夜　よみ人しらず

古恋一
我恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれともゆく方もなし

うきもの

後撰
恋しくはきてもみよかしちはやふる神のいさむるみちならなくに

拾恋一
恋しなん後は何せんいける日のためこそ人はみまくほしけれ　大伴百世

古意四
悲しすとうるひく山のさくら花これともあらぬ[illegible]あるも
友則

古新下
あかつらし袖の中にやへにけんつ[illegible]しぬれなさこちかな
こちのく

古意三
しれしぬれはかくくとあけぬけはなれかきぬくなるそなるさ
よこ人しる

拾新賀
心ありてとつまはあしす世中にまちやなしやのきゝ海はしさそ
よこ人しる

催馬楽
梅かえにきゐり　梅かえ三首

古意五
まれよれやこはあやなし梅花いろこそこゝ○かやそうつる
こう○

古作
さむしろる衣かたしきこよひもや我をまつらんうちれさし姫
よこ人志す

古意誠
大かれとこれ山ちかいさや川いさとこゝへよ我なましすか

伊勢
たるしよれはしか川邊のほとりを我すむかれあまれこそ出

万
山城のこゝろの里にむまはあれとうちかそくりきこ我しひる
おきかせ

古意四
うしてまるきそいたん方そなさかしこゝにこゝ[illegible]かけなすして

拾遺四　人丸
こゝちの○れ却やのうつれまゐこまりいつせくもあつかはまあはせて
古遺一　よみ人しらず
いつとても逢しかゝすはあしの○とも秋のゆふくはあやしかりけり
新勅遺四　よみ人しらず
川無れ沢なるき波まましつまかは流かはあれあそとこそよみん
古歌　小町
まひぬれは身をうきくされねをとしてさそふあふはいなんとそ思ふ
白雲のはてゝ山まこもるとも思ひこちかたしこつ○さしあや
伊勢
逢しとこゝしし川ませしこそ今は神はうけすもなりまけつかな
催馬子
こちのくちこけふれこうま我はありとおやまはつけよ心あひの風
古遺四　よみ人しらず
すまれあまれ塩やくそふり風をいたゝ思ふぬかこまるひこさまり
古歌
君をしきてあくし心を見るもくはすゑの松山なるとこえなん
新勅遺一　よみ人しらず
君まありん其日はいつも松の木れこけれこゝれて物をこそおもへ
大和
行きひぬつ身なけてんつれくれ生田れ川は名のみ吹かり

古意一
我恋ハむなしき毛にこちぬらしたひやれともわかくもなし
よこ人しらす
古俳
ふしも又むまれ貝こそ吹つるれひつしれあもこちつきぬらん
赤漢大明ろ
古俳
人にありんつきれなさにハたひをきてむまたしまたに心やけとり
小町
伊勢
たひあまりいてにしむのあらなんにふくこしハむむすひせに

かけろふ

義考集
ワまれぬをかくにすかれとワすられぬいき海にしていき海にをん
ワさも子かきてハよりころまさちしらそもむつましきゆりとこへハ
よこ人しらす
古意一
かし衣日もゆふくれになる時ハかへまくそ人もしひしき
よこ人しらす
古衣
なき人のやとにかよふらくゆとしきすかけてねをのこなくとつけなん
人丸
六帖衣
ことにいてしいたしやさしき山川のこまろ心をせきそかねつ
よこ人しらす
古俳
世中のうさにひことに力をなけハふるき谷こそあきくなるあ

みしかれ来れかゝる事に苦むしろ作りをりけんこそぬさなしに

古抱名
波の音ひろへ出そこゝれけりこれなんそれとうつせこゝへし

平子院出製

後旅
草枕まみちむしろにくへこゝに心をくこく抱なしまりしや

こしなり

後急二
心こゝにいさおりこゝんなるを川うれしきせにもなれあしやと

とのゝうし本

古秋上
をゝなへしおほうのへにやうせハあやなくあこれ名をや立なん

せしかふことゝうほうに又まれ君をりなそけきそしれたん

おきうを

古秋上
これをかも志り人にせんこゝきこれ松をひしれなしなくつり

夏とてもちるき抱ハけろ子のあるゝちきこれせにこそ名れ

自なしひ

伊勢
百とせに一とせこゝぬつくまつも我をうゝしおもけりこゝ

宿家
なれゆく我ハこゝろけと吹ぬとも君しかこゝと吹てとくめに

名にしおはゞいざこと問はん都鳥我思ふ人はありやなしやと

よみ人しらず

後撰雑上

世中にあらぬところもえてしかな年ふりにたるかたちかくさん

遍昭

後撰雑秋

こゝろしも行ゆふくれをまつ人の物おもひさくらまさる

小町

新古秋上

誰をかもまつちの山のをみなへし秋とちきれる人そあるらし

よみ人しらず

古今

花とみてをらんとすれは女郎花うたゝあるさまの名にこそありけれ

新古秋上

これをかもまつちの山の　上と同

古今秋上

山里は秋こそことにわひしけれ鹿のなくねにめをさましつゝ

古今雑下

世のうきめみえぬ山ちへいらんにはおもふ人こそほたしなりけれ

もののよしな

後春下

あたら夜の月と花とをおなしくは心しれらん人にみせはや

信明

拾遺冬の方

昔みし川のせちかき里なれはこほれのけさしれとけかくらん

古旋頭

はつせ川ふる川のへに二本ある杉年をへて又もあひみん二本ある杉

よみ人の春へ
さしかへもくりくん拙りにさけ花に海りさるてちりくらぬ花もし　よみ人しらず

拾遺四
夜衣うすきさまらしれそれまうしひとへにかさまちうちつれい　遍昭

後撰三
くもらぬ月にはかくれそしてしもむさしのゝはるくすをそてすやまかん

うき母春へ
花の香をさそふ風そはりかとをけて花ましおとくはしからぬ　なりひら

古今十八
月やあらぬ春やむかしの春ならぬわか身ひとつはもとの身にして

拾遺雑春
わかさりし君か句ひの恋しさに梅の花をそけさはおりつる　中務卿具平親王

身はれをかさし

拾遺三
これをしもさきにたらしき心みかさそふぬ人にあまりあとしき　よ人しらず

古今一
あつまてへなおもろうちまちりわのをとまそつきひわをる家　つらゆき

承應三甲年八月吉日

洛陽寺町通

八尾勘兵衛刊行

69038
6AP78